白菜根こぶ病研究の想い出

田　村　　實

石川県内におけるアブラナ科根こぶ病発生は，1963年からの調査によれば金沢市・野々市町にわたる伏見川流域を中心に急速に多発し被害が拡大して来た。そのため'64年から調査研究に取り組んだ。当時は梅原吉廣君を中心にして研究を進め，発生の実態や病原菌の分布などを調べて来たが，彼は'66年に故郷である富山県の農試に転任することになった。後任には竹谷宏二君を迎えることとなったが，根こぶ病に関しては対象を当時最も被害の大きかった白菜に絞って二人で取り組むこととした。調査研究を進めていくと，面白い結果も得られるようになり，集中して取り組むようになっていった。梅原君が中心にやった調査結果は本誌14号，石川農試研究報告に発表したが，その後得られた結果等は'74年まで纏めていなかった。しかしそれらの結果をどうして入手したか知らないが，神奈川県から白菜栽培組合の幹部が尋ねて来て細かい質問を受けるというようなこともあった。当時はアブラナ科根こぶ病について深く取り組んでいる方が少なかったためだろうと思っていた。北陸地区の試験成績検討会だったか，北陸病虫研発表会の時だったか忘れたが，夜の懇親会の席上で根こぶ病の成果について好評の言を聞き，誰かが「君の研究成果は隔年ごとに良いという隔年結実の傾向にあるから，来年はきっと素晴らしいヒットが期待出来るよ」という話まで出て大笑いした。ところがそのヒットの球は誠に思わぬ方向に飛んでいったのである。つまり来年にあたる'73年には，大変なことが起こってしまったのである。石川県の米どころである加賀平野で変色米が大発生し，自主流通米が返品されるという事態が生じたのである。最初はカメムシか何かの被害だろうと虫関係の石崎久次君が調べていたが，どうも違うらしい，病気ではないかということになり，調査したところ，それはわが国ではまだ報告されていなかった腹黒米であることが分かり，その発生生態，防除法を急遽検討しなければならなくなってしまった。本県の中心的農産物である米の問題を放って置く訳にはいかず，そのお陰で根こぶ病の方は全く手が着けられない状態に追い込まれてしまった。腹黒米の研究が一段落した'77年になって根こぶ病のそれまでの結果を農試研究報告に纏めたが，心に何かが残る想いがしてならない。